

東京高齢協創立総会から

荒井 なみ子

(東京高齢者協同組合・理事)



「新しい葬送」の事業を

高齢者協同組合の大きな取組として、高齢者の死を前にした地域医療のあり方などを考えていかねばなりません。人生のその最後での幕引き…葬式こそ、お仕着せの葬式ではなく創造的に取り組んでいくべきだと考えます。

新しい葬式を考えるためには、今までのしてもらった葬式という考え方を捨て去り、生きてきた証を自分自らがたてるという「権利意識」の下に取り組まねばなりません。

お葬式にかかる平均的な費用は、東京都の調査で303万円です。慣例、儀礼という中にあまりにも無駄な費用が多く、お決まりのパターンである業者まかせのお仕着せの葬式です。もっと簡素で荘厳な、高齢者自らが協同して執り行う新しい葬送ができませんでしょうか。葬送には法的規制はほとんどありません。あれぐらひは常識という自己暗示にかかっている、新しい高齢者の時代の幕は開けられないでしょう。

私たちが創り出す「新しい葬送」は、高齢者協同組合の葬送委員会（仮称）を中心とする会員制の互助組織です。会員が希望する葬送内容を生前契約し、その契約内容を葬送委員会と会員が協同して執り行います。また、従来の形式でない葬送を行うことは周囲の人の理解も必要となるので、「新しい葬送を協同で考える」市民講座なども開催して、その普及につとめます。

私たちの提唱する「新しい葬送」は従来の仏式、キリスト教式の葬儀を否定するものではありません。

ん。教養講座などを通じて「それぞれの人の生き様の延長線上にあるような葬送」「残されたものがその人の思い出を大切に生きていく葬送」を考えていきます。その点では、多くの人がこの「新しい葬送」に参加して意見を述べていただき、自分たちの人生の幕引きを商業主義にまかせないで、高齢者がお互いに助け合う非営利の協同事業として、この新しい葬送の事業化をみんなで力を合わせて実現しましょう。

具体的な取り組みとしての提案(一部抜粋)

新しい葬送を協同で考える市民講座

- ・東京高齢者協同組合事業と新しい葬送
- ・寺、教会と葬送儀式についての意義
- ・老人を取り巻く家族と社会
- ・法律の立場から見た葬送について
- ・世界の立場から葬送を考える …など。

新しい葬送における改良事業

- ・お棺について
指物師（大工）とデザイナーの仕事…簡素・個性的な品位を保つ・廉価・地球規模の木材不足を考慮して、例えば寄せ木細工などの発想を。
- ・骨壺について
コーディネーターと弁護士の仕事…例えば、陶芸教室で自分でつくる。
- ・献花、供花について
花屋、フラワー教室、花の産直の仕事…形式主義から脱皮して、人々の死を共有できる思

想への転換。

- ・ビデオ、録音テープ編集
- ナレーター、録音スタジオなど集団作業の仕事…故人の好きな音楽の収録やコメントを放映。
- ・写真、文章入り小冊子の発行
- 文章指導者や家事整理屋の仕事…生前のアル

バム整理や葬送記念のアルバム作成、自分史づくり。

- ・出前弁当屋、出前喫茶
- 若者のバイクや配達車主力の仕事。

…など。

※この文章は、荒井さんが提案された内容から、編集部の責任で一部抜粋したものです。

東京高齢協創立総会から

重見 通明

(東京高齢者協同組合・三多摩地区世話人)



近ごろ、どうしてそんなに高齢者の問題に熱を上げているのか、とよく聞かれる。実は、9月13日から16日までの4日間、地元で開催された分も含めて、高齢者関係の行事に出づばりだったので、注目的になったらしい。カッコいいことを言うのはきらいだが、とりあえずは「自分自身のことでもありますからね。」と答えているが、こういう質問はどうも苦手だ。

『仕事の発見』誌から取材の方が来られたとき私は、25年ごとの節目ということをお話した。それは10行ほどに要約されて掲載された。これを蒸し返して書くことにはいささか忸怩たる思いもなしとしないが、今年、高齢者協同組合の事業に興味を持ち、進んでお手伝いするようになって、あらためて生きていることの素晴らしさを実感しているので、自らの決意を再確認する意味からも敢て書くことにした。共通の読者の方、お許しください。

私は、在学中召集され、約3年軍務に服した後、昭和20年8月、台湾最南端の地にいた部隊で終戦を迎えた。25歳になったばかりだった。そのとき、生きててよかったという思いと同時に青春を棒に

振ったという口悔しさが吹き上げてきた。そして、人生が50年であるならば残りの25年でこのブランクを取り返してやろうと決心した。

家族と一緒に引き揚げてきて熊本市に落ち着いた後、昭和24年1月単身再上京。以後ガムシャラに働いて25年経過。一応勤務先で管理職の地位についていたが、50歳になったこの年(昭和45年)二つの事件が相次いで起こった。

一つは、幼稚園からずっと一緒だった無二の親友が過労死したこと。この友人は上場企業に勤務して役員昇格を目前にしながらか50歳の若さで、国には捧げなかった生命を会社に捧げてあの世へ行ってしまったのだ。そして、相前後して私は、営業所長として抜群の成績を挙げながら、同僚の嫉みに足を引っ張られて左遷された。私は、組織に忠誠を尽くすことの空しさを身に沁みて感じた。この二つが、その後の私の生き方を変えた。立身出世的な考えを改めて、なにか世間の役に立つことをしようと考えようになった。団地自治会の会長になったり居住市の選挙管理委員を引き受けたりしたのは、それから間もなくだ。本業との兼ね合いでかなりハードだったが、やりがいがあっ

た。定年退職後は、市の広報で知った高齢者の茶飲み話の会に毎週出席して、近隣の人たちと親しくすることに努めた。この集会への出席を10年以上続けているうち、私は、いつとはなく、今まであまり関心のなかった高齢者に対する福祉ということに目を向けるようになっていた。

戦後50年たち、75歳になった昨今、それまで無病息災が自慢だったのに、急病で入院する羽目になった。一度に4つも病気が発見され、結局、胆のう切除手術をうけた。幸い予後は順調で、各種

の検査の結果、体力も五十代といわれるまでになったが、この入院が、またまた私の転機となった。

退院後、体力の回復に努めながら模索していたとき、NHKテレビで高齢者協同組合のことが紹介された。さっそく集会に参加させて頂いた私は、これが私に与えられた最後の仕事だと直感した。私にとって次の転機は、恐らく訪れないであろう。ならば残りの人生は凝縮させ中身の濃いものとして終わらせたいというのが、今の私の願いである。高齢者協同組合がその場を与えてくれたことを心から感謝しています。

東京高齢協創立総会から

山本 千鶴子

(東京高齢者協同組合・南部地区世話人)



1994年9月私が事業団に入って2ヶ月位経った時、千駄ヶ谷の日本青年館で事業団の高齢者協同組合の発足に出席させて頂きました。どんな主旨でどんな形でと、好奇にかられて出席しました。

私は意外とその場その時で生活し、長い人生の展望などありませんでした。戦争にも会いその時に怪我もしました。色々な事に会い、事故に会い、あれこれの思いはありましても精一杯一生懸命過ごして来ました。主人が亡くなり、子供と離れて生活し70歳になってどんな老後と考えながら働いている時、心臓が悪くなりまして1日の仕事が出来なくなりました。体力もなく何も身についた事もなく、カラオケやお酒を飲む楽しみもなく、この年で何が出来るのでしょうかと思い、そこで手仕事等と考えました。

長い間、家事や仕事の気分転換に親の見よう見まねで編物をやっていたのが意外と手について、上手に仕上がっていました。これを高齢協のつな

がり仕事に出来ないものかと考えました。

ではどんな様にと、参考になる事を調べました。毛糸屋さんでは今の世代の若い人は新しい糸を買って編みますが、編み返す事は余りないと言う事でした。今、色々な物が有りすぎて使い捨ての時代でゴミの山、捨て場も困っており、リサイクルが叫ばれている時です。衣類も豊富でフリーマーケットで古着が山になっているのを見ました。その中で毛糸製品が余りありませんでした。そこで古毛糸をあつめて、ほどいて、洗って湯のしをしてそれを再生すればと考えました。そして昔の手織り機を思い出しまして見学に行きました。今、手元で使っている毛糸編機より操作しやすいので、これは年寄りでも出来ると考えました。私共、子供の折には母親達が皆んなやっていた事です。着物類にしてもすり切れればそれを天地返し、又切れればその部分を切り取って半纏にすると、何回も縫返しておりました。毛糸に



撮影・五味明憲

してもほどけば一本の糸になり、細くなれば糸を合せれば太くなり、どんな形にも変えられます。

まずやってみようとして古毛糸集めを商店街でやってみました。編んだそのまんまのもの、編みかけた途中のもの、そして意外なのは新品の余り糸が1玉、2玉、とこれが一番沢山ありました。それを手織り機で織ったり、カギ針で編んだり、少ない糸はモチーフに編んで100枚、200枚と継いでヒザ掛け、コタツ掛け等製品にしました。これを皆さんに編んで戴き、市販の製品の値段を参考にしてその中から一つ仕上げていくうち手間賃を出してはと考えました。編物だけでなく家で寝ている着物の仕立直し、洋服のリホームと、そこで「ハンド工房」と名づけました。

私が障害者手帳をもらう様になりましてこの手帳入れをさがしましたが市販されておりませんでした。これも試作に挑戦しました。又介護用品のうち円座、背当て、指の運動用品等を作りました。これを病院の売店や、障害者用品を置いてあるお

店に置かせてもらって等、考えました。

この様な品でしたら年寄りがたまり場等で寄り合って作れると思います。皆さんで寄り合って情報交換の話をしたり、社会とのつながりを持ち、昔の人達の知恵を忘れずこれを受け継いで物を大切に、高齢協を通じて生活を高め、生きがいを見つけ元気で過ごせればと思います。

手仕事出来る人集まれ——。